



## オックスフォード大学に 留学して

株式会社神戸製鋼所材料研究所研究員 <sup>あるが</sup> 有賀康博

2008年4月から、Academic Visitorとして英国オックスフォード大学に留学させていただいています。1858年の日英修好通商条約締結から150周年にあたる日英交流の節目となる年に、英国留学できたことを大変光栄なことと思っています。日常の生活の中で、異国の文化を日々実感していますが、英国は環境に対する意識が高い国だと感じます。最近発表された2006年の温室効果ガスの排出量は、米国(14%増加)や日本(5%増加)を尻目に、1990年比で15%の削減を達成しています。英国の都市では、市街地の周辺にPark & Rideと呼ばれる大型の駐車場があり、街の中心部に行くのに自家用車からバスに乗り換える仕組みが発達しています。これが渋滞緩和に繋がっているのですが、自動車から排出されるCO<sub>2</sub>をさらに削減することを目的として、オックスフォードではこれまで一部で有料であったPark & Rideの駐車料金を全て無料にするプランが近頃公表され、行政の判断に感心したところです。

オックスフォードは、ロンドン・ヒースロー空港から自動車ですら約1時間の距離で、空港やロンドン市内へはバス(Coach)がほぼ24時間頻繁に走っています。また、西に足を延ばせば、典型的な英国のカントリーサイドの光景をなすコッツウォルズがあり、床から屋根の瓦に至るまで地元で採れる蜂蜜色のライムストーンを使用して造られた建築物が、その風景を美しく彩っています。例年6月には、エリザベス女王の誕生式典がロンドンで開催されます。といっても生まれた日ではなく、戴冠した日を“新しい国王が誕生した日”として祝う式典です。軍隊総出の様相を呈しており、祝福のためにバッキンガム宮殿上空を飛び去った無数の戦闘機が、その隊列を崩さずにそのままオックスフォードの上空を低空飛行していきました。轟音とともに最初の一团を見たときは何事かと思いましたが、自宅にいながら航空ショーさながらのパフォーマンスに遭遇し、度肝を抜かれました。

さて、私が現在在籍しているDepartment of MaterialsのG. D. W. Smith教授およびA. Cerezo教授の研究室には、世界各国から研究者や学生が集まっており、国籍や年齢など気にしないオープンマインドな交流を楽しんでいます。学業



写真 Wolfson Collegeにて。  
(左から4人目が筆者。英国発祥のボールゲーム：croquet(日本語ではクロケター)を研究室のメンバーと体験した。)

や研究の相談や意見交換をしたり、何世紀もの歴史を築いてきたカレッジの壮観なホールでの昼食を取ったりなど、学校生活についてはもちろんのこと、教授の自宅でのアフタヌーンティーや、カレッジ対抗のレガッタ観戦、花火大会の鑑賞など、プライベートにおける楽しみも提供してもらっています。

オックスフォードは、まさに大学が街を形成しており、あちこちにある図書館で、500年以上前からの膨大な書籍が保管されています。材料工学の分野では、そんな何百年も前の文献はありませんので、他に比べれば新しい学問だということを実感しました。とはいえ、現在では多種多様な学協会が存在し、論文集や書籍が次々と発刊されています。私も専門分野の文献を頻繁に調べていますが、オックスフォード大学のIDを持っていれば、主要な雑誌の論文は全てインターネットにて閲覧およびダウンロードが簡単にでき、大変重用しています。マイナーな雑誌や単行本などについては、図書館とその中の保管場所、貸出状況等の一覧情報がインターネット上で確認できます。そして、リクエストしておけば、図書館の受付など指定した場所に用意してくれるため、文献を読むまでが究極に効率化されており、膨大な蔵書による煩雑さを感じさせません。

このような環境の中で、研究の楽しさを再認識しながら、新しい技術の習得に没頭することができ、かけがえのない充実した日々を過ごしています。また、西洋文化に触れることで、渡英前は特に意識していなかった日本文化の長所に気づくことができました。組織の中で自分の置かれている立場を認識しつつ、さらに他のメンバーを思いやり、ハーモニーを奏できるように協力する「和」の文化に誇りを持ち、今後の人生を歩んでいきたいと思えます。

最後に、本留学の機会を与えてくださった神戸製鋼所の皆様に、本紙面を借りて深く感謝申し上げます。

(2008年11月25日受理)

(連絡先：aruga.yasuhiro@kobelco.com)